

**立教大学コミュニティ福祉研究学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅢ(助教研究支援) 2016年度研究成果報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部 助教	権 安理	印
研究課題名	被災地における廃校活用を通じたコミュニティの再編成： 新たな公共性の創造		
研究期間	2016年度		
研究経費	300千円		

【研究の概要】

1. 目的

廃校の発生とその活用方法が社会問題となって久しい。廃校は、基本的には少子化による児童生徒数の減少に起因するために、それは、当該地域のコミュニティが弱体化していることを意味する。廃校という建造物は、まさにそのことを象徴している。東日本大震災の被災地でも、震災以前から少子高齢化や過疎化は進展しており、したがって、被災地は「被災」という特殊な困難と、少子高齢化という全国的な問題の双方に同時に直面している、つまりは二重の問題を抱えていると言える。だが、その困難な状況から、廃校を活用することを通じて、コミュニティを再編成する動向が見られるようになってきた。ここで「再編成」という言葉を使用したのは、学校を前提とした学区という地縁コミュニティの復活ということには還元できない、新しい共同関係が形成されつつあることを意味するためである。このような関心から、本研究は、被災地における廃校活用事例を調査・紹介するが、特に、そこにおいて再編成されているコミュニティの特質や可能性、課題について、理論・思想研究をふまえて明らかにすることを目的としている。

2. 方法

理論・思想研究として、R・ローティのリベラリズムと、M・サンデル、M・ウォルツァーのコミュニタリアニズムの文献調査を行った。一般的には対立する思想と解釈されている彼らの思想を連続した地平から読むことを通じて、被災地の実地調査のための理論的準拠枠を構築した。また、2016年8月と11月に被災地（宮城県）を訪れ、三つの廃校でインタビュー調査を行った。具体的には、宮城県本吉郡南三陸町のYes工房（旧入谷中学校）、さんさん館（旧林際小学校、体験型宿泊施設）、石巻市 moriumius（旧桑浜小学校、体験型宿泊施設）である。

3. 結果

文献調査をふまえた実地調査の結果、以下の点が明らかになった。被災時には、三つの廃校のうち旧入谷中学校と旧林際小学校が活用され、前者は避難所となり、後者は警察の駐在所となった。被災の後、旧林際小学校は、被災前から続けられ被災時には一時閉鎖していた宿泊施設に戻り、旧桑浜小学校は、自然体験ができる宿泊施設としてリニューアルオープンした。そして、旧入谷中学校は工房（Yes工房）となったが、特にYes工房が復興の中心・象徴として機能していたことが明らかになった。旧入谷中学校は、まず被災後には、避難生活における受動的生活を回避し、不安な気持ちを紛らわせるための“単純作業”をする場として機能した。この点は、ローティが言う「残酷さの回避」のための「連帯」という観点から説明可能である。やがて同校は、その作業の対象（＝生産物）であった文鎮（南三陸の名産であるタコをモチーフにした文鎮「オクトパス君」）を「商品（goods）」として販売する工房となる。その結果、南三陸に、雇用、売り上げ、知名度のアップ、地域外からの集客、地域内外における交流の促進といった様々な「善（good）」がもたらされることになる。このような意味で、旧入谷中学校は、かつて学校（入谷中学校）が地縁コミュニティの形成に貢献してきた点とは違う意味で、新たなコミュニティを創造する拠点となっていることが明らかにされた。この点は、コミュニタリアニズムが言う「公共財／善（good(s))」の共有という観点から説明可能である

【研究の成果】（今後発表予定のものを含む）

具体的研究成果は以下の通りである。権安理（2017）「南三陸町における廃校活用を通じたコミュニティの再編成——リベラリズム及びコミュニタリアニズムに依拠した事例研究」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第19号。

